幼保小の連携・接続に関する調査 2021 概要版

保育・教育の質確保・向上に向けた幼保小の連携や交流、接続カリキュラム等の実施状況を把握するため、市内保育施設、小学校を対象とした実態調査を実施しました。昨年から、文部科学省「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」でも、学びの連続性を意識したカリキュラムの編成・実施や、幼児教育の質に関する認識の共有の必要性など、幼保小連携・接続が注目を浴びているところです。

今後の皆様のお取組の参考にしていただけるよう、概要版を作成しましたので、ぜひご参照ください。

なお、分析も含めた詳細版は、ホームページに掲載しております。併せてご活用ください。

調査にご協力いただいた学校及び幼児教育施設数(　)内は回収率

幼　稚　園	180 園(80%)
認定こども園	51 園(85%)
私立保育所	591 園(77%)
公立保育所	65 園(100%)
公立小学校・義務教育学校	339 校(100%)
合　計	1226 園校(84%)

調査担当

幼稚園、認定こども園、保育所・・・こども青少年局　子育て支援課　幼保小連携担当

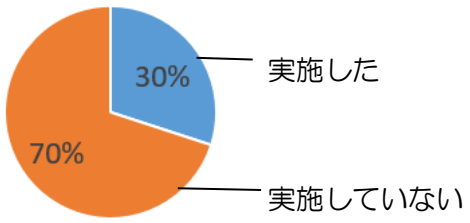
小学校・義務教育学校　　・・・教育委員会小中学校企画課

報告書編集・発行

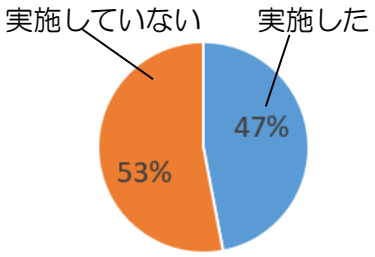
こども青少年局保育・教育人材課幼保小連携担当　671－3731

【幼児教育施設編】

当該期間（令和２年 10 月～３月）は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、子ども同士の交流や職員間の連携は、難しさがあったようです。実施されたことの内訳をみると、小学校との交流に加えて、近隣園との交流も行われています。

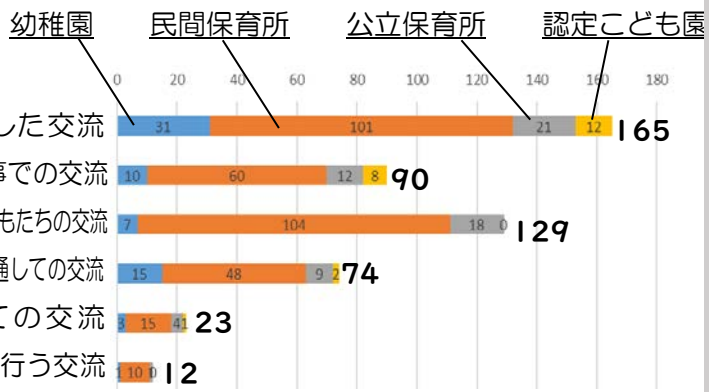


子ども同士の交流(全施設合計)



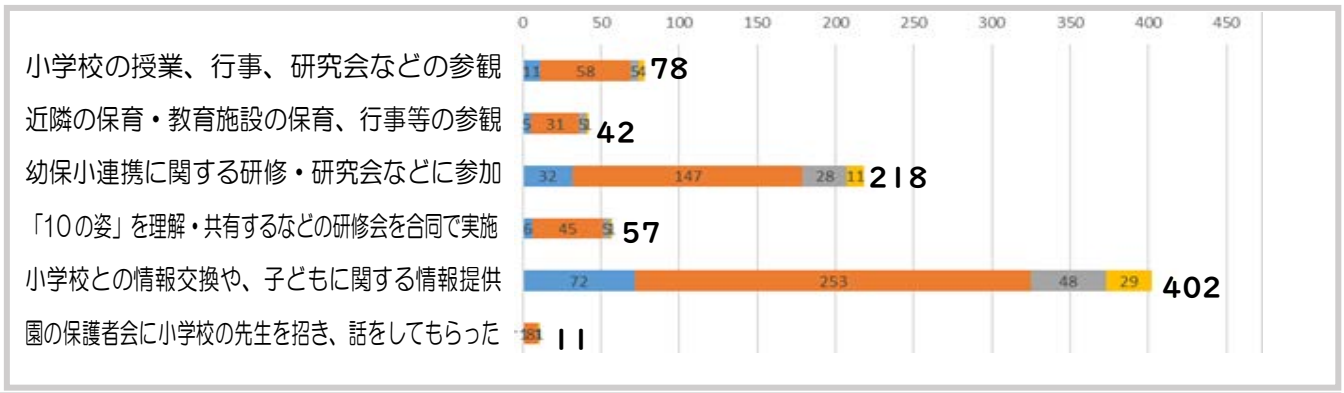
職員間での連携の取組(全施設合計)

≪交流の種類（園数）≫

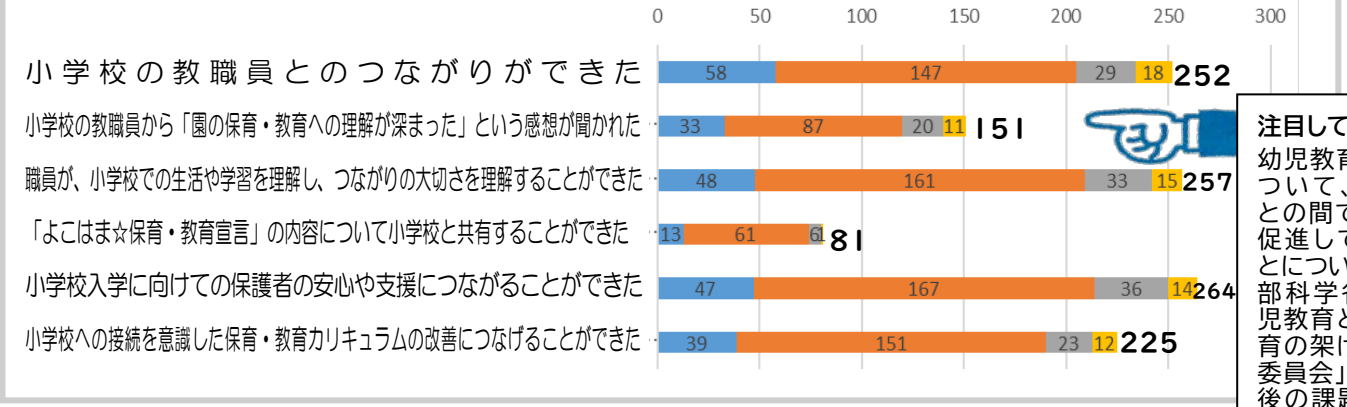


≪教職員間の連携に取り組んだ内容（園数）≫

職員間での連携の取組では、小学校との情報交換や子どもに関する情報提供が盛んであることが分かります。園児及び保護者の、入学に向けての安心や支援に効果的につなげていただいているようです。小学校の授業、行事、研究科などの参観についても、コロナ禍ではありましたが、78 園で取り組まれていました。

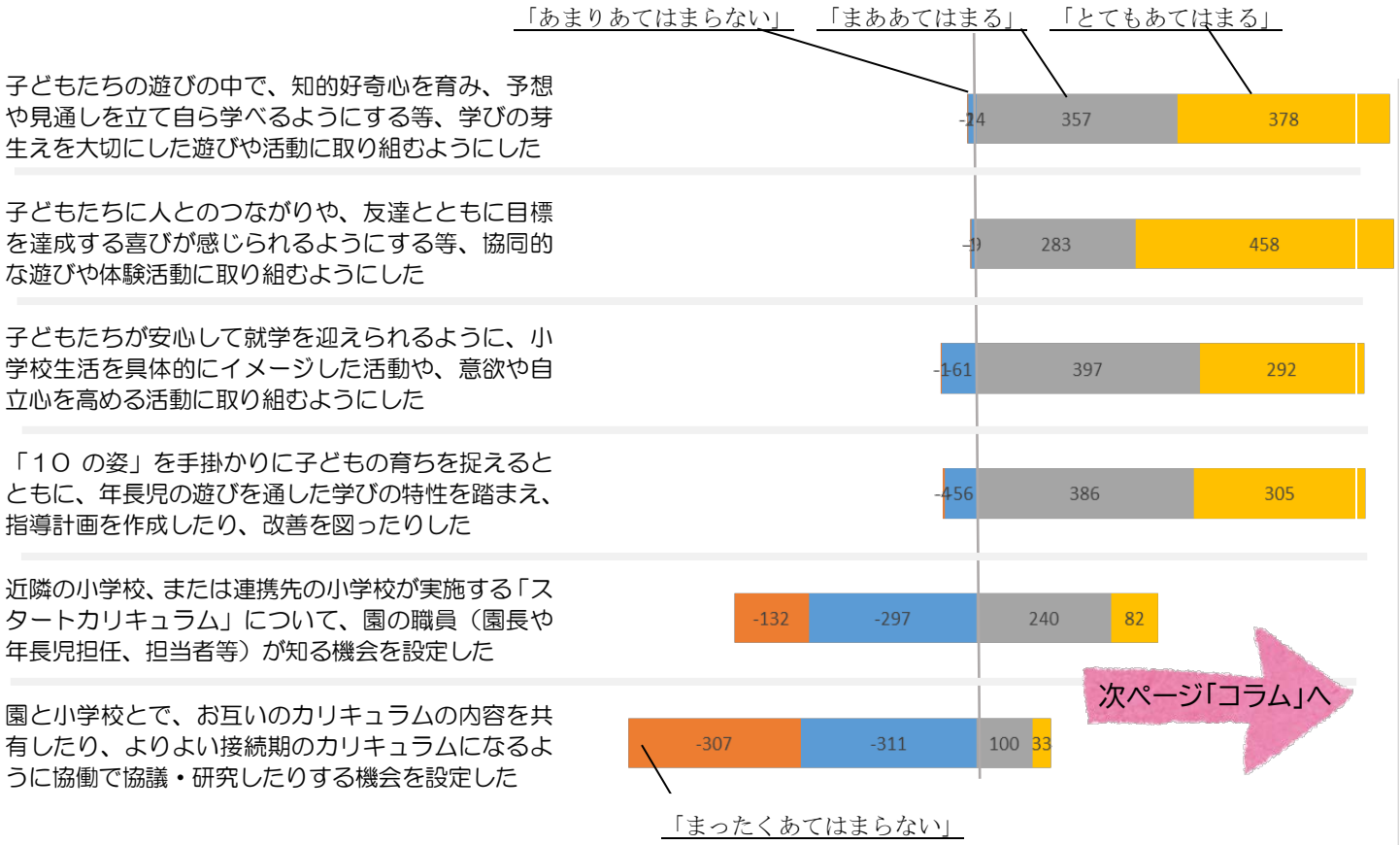


≪連携を図ることによる成果（園数）≫



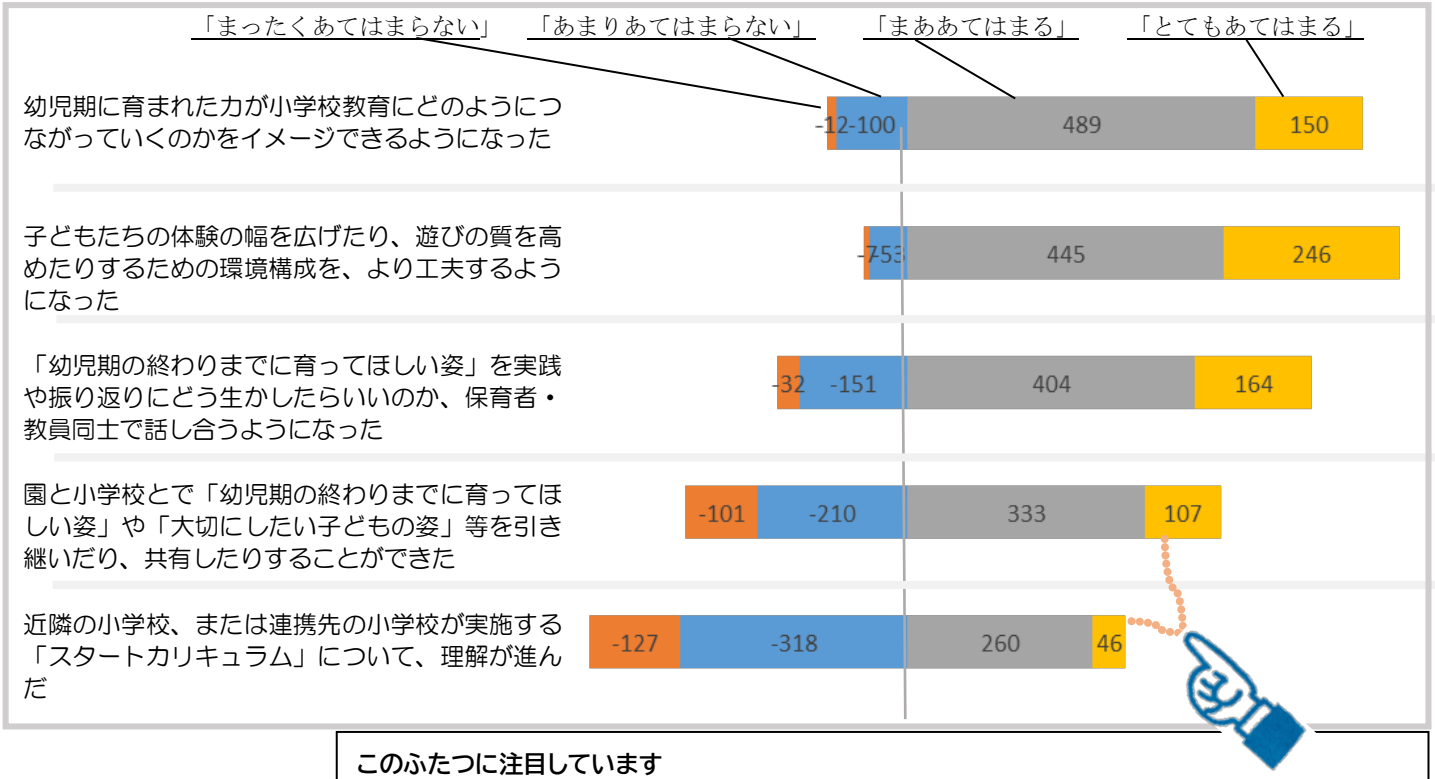
注目しています
幼児教育の質について、小学校との間で理解を促進していくことについては、文部科学省の「幼児教育と学校教育の架け橋特別委員会」でも、今後の課題として取り上げられています。

≪小学校への円滑な接続を意識した活動や取組を行っていると答えた園では、どのような取組を行ったか。n=751≫



次ページ「コラム」へ

≪小学校への円滑な接続を意識した取組をしてよかった点≫



このふたつに注目しています

幼稚園教育要領解説には、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、幼稚園教育を通した幼児の成長を幼稚園教育関係者以外にも、わかりやすく伝えることにも資するものであり、各幼稚園での工夫が期待される」とされています。（第1章　第2節）

連携先の小学校や、家庭、地域の子どもを支える方々と、子どもの育ちや学びを共有していく際に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が十分に活用されている園が 107 もあります。わたしたちも、このような事例を把握し、研修などで発信していきたいと思います。

また、小学校のスタートカリキュラムに保育者が関わっている事例も見られるようになっています。小学校職員から話を聞くだけでなく、実際に子どもと関わりながら、体験的に理解していく事例として注目しています。

2つ目の設問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した園の数が全体の 90%以上あるように、小学校への円滑な接続を意識したことにより、子どもの学びの場が広がり、充実した教育活動につながったことを成果として実感できていることが分かりました。

さらに、この時期ならではの活動に取り組んだことにより、年長児に資質・能力が育まれ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して話し合うことで、小学校教育とのつながりをイメージできたと捉える園も多くありました。

コラム

「大切にしたい子どもの姿」の共有や、小学校で実施する「スタートカリキュラム」について理解を促す取組

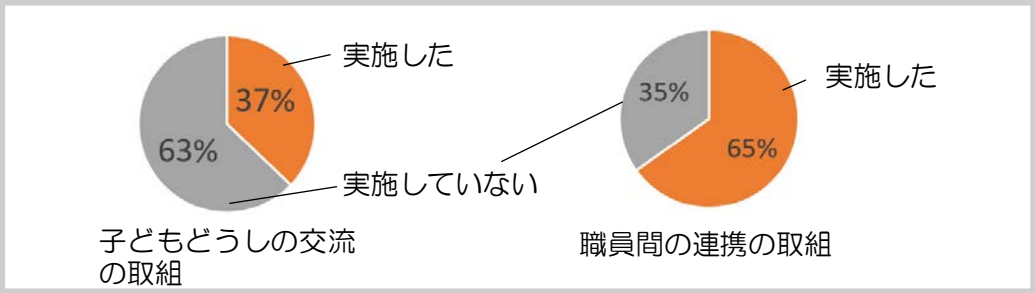
最近、様々な事例を収集する中で、次のような取組が見られるようになりました。

一つ目は、小学校での音楽や図画工作などの活動（映像等資料）を小学校の教諭に提供してもらい、一緒に、様々な視点から意見交換する取組です。保育者が、園でのリズム遊びや造形遊びを行う際に、小学校の教科とのつながりを意識したり、共同する楽しさや充実感を味わえる実践を工夫したりすることにつながっているそうです。

二つ目は、保育者が、小学校の授業研究会や参観日に、子どもの姿を見に行くことです。例えば、小学校での話し合い活動の様子から、園でも、身近な共通の問題を自分たちで考えたり、伝えあったり、解決したりする時間を大切にしたことで仲間意識を育むことにつながったということです。

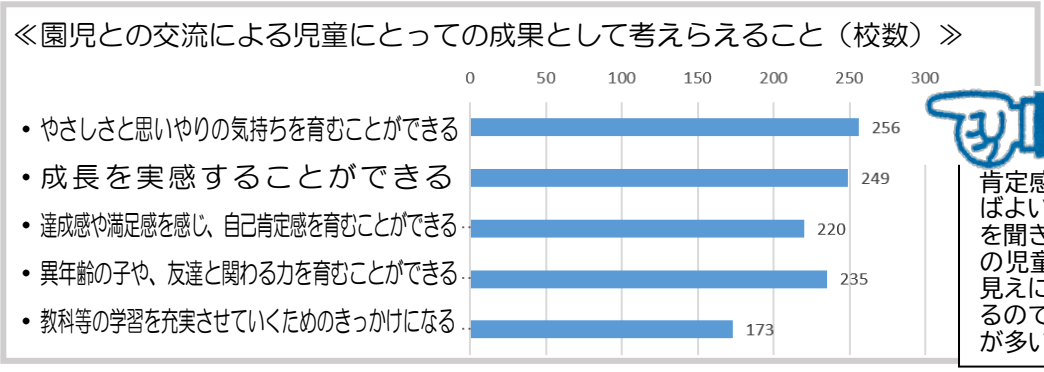
【小学校編】

当該期間（令和２年 10 月～３月）は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、子ども同士の交流を実現することは難しさがありましたが、職員同士の連携は、各学校で模索され取り組まれていました。



内訳をみると、園児・児童間の連携の取組で、当該期間に多く行われていたものは、「学習活動での交流活動（直接の対面交流でなくても構いません）」134 校と「ICT 機器を活用した映像による交流」118 校でした。

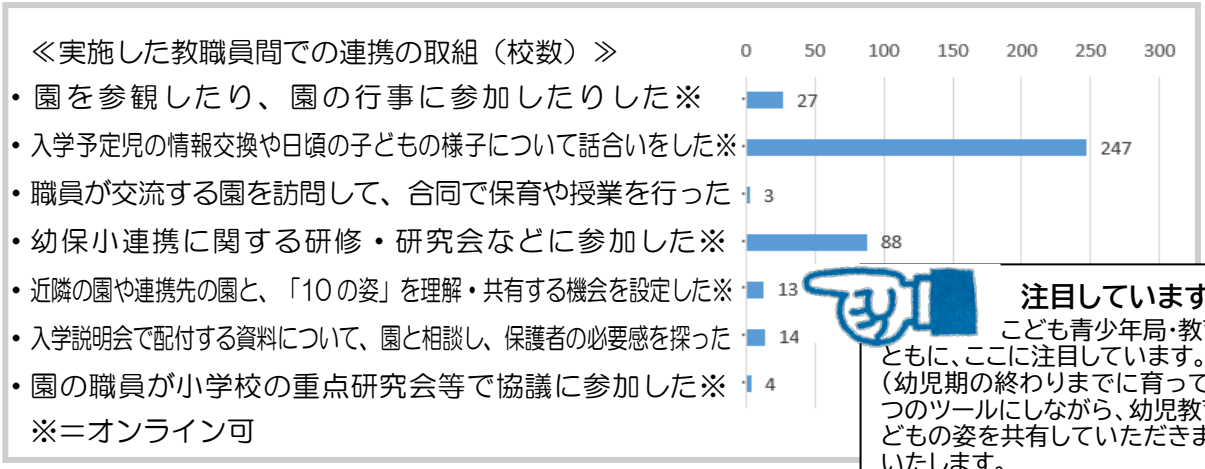
コロナ禍と重なり、実現が難しかった交流活動ですが、園児との交流による、児童にとっての成果を多くの学校が想定していることが分かりました。



注目しています

教育活動を通して、自己肯定感や学びに向かう力をどう育めばよいのか、難しさを感じるという声を聞きます。この結果からは、幼保小の児童間の交流が、そのような目に見えにくい力を育む一つの要因になるのではないかと期待している学校が多いことが読み取れます。

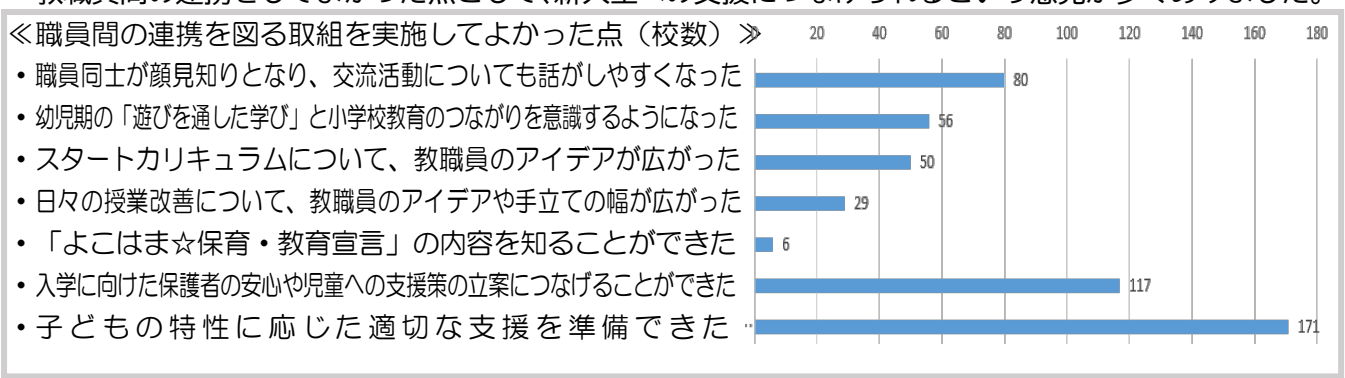
教職員間の連携では、子どもについての情報交換や日頃の子どもの様子について話し合うことがよく取り組まれていました。



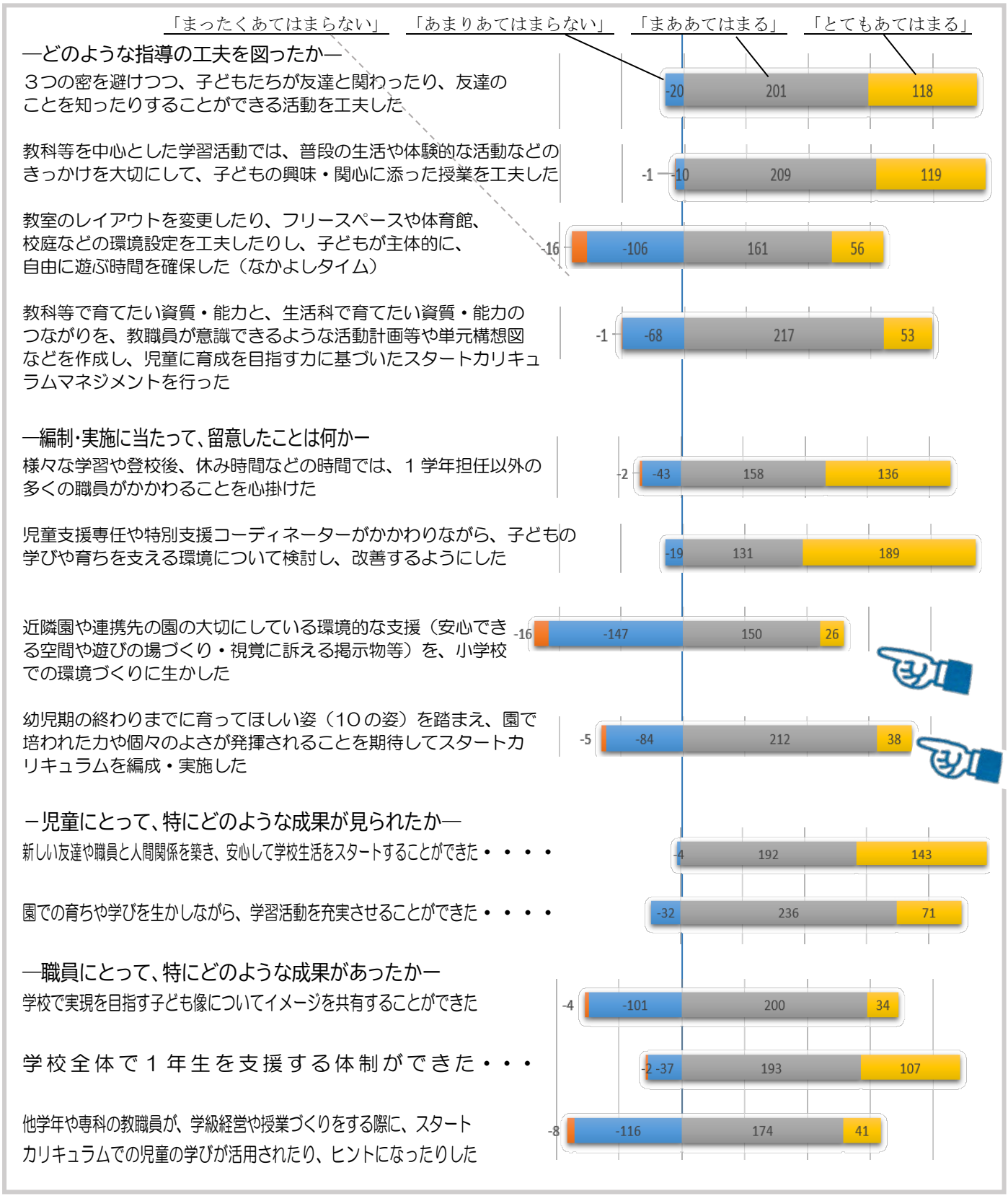
注目しています

こども青少年局･教育委員会事務局ともに、ここに注目しています。この「10 の姿」（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）を一つのツールにしながら、幼児教育で育ち学ぶ子どもの姿を共有していただきますよう、お願いいたします。

教職員間の連携をしてよかった点として、新入生への支援につなげられるという意見が多くありました。



今年度のスタートカリキュラムに焦点を当てて、調査を行いました。各項目で、成果が見られた設問と、課題が見られた設問に焦点を当ててご紹介します。



子どもが安心して入学後の生活や学習に向かえるよう、体験を重視したり、児童支援専任や多くの職員が関わったり、園での育ちや学びを生かしたりできるようなスタートカリキュラムが大切にされていることがわかりました。マークのついているところは、現時点では低い数値を示していますが、今後大切にしたい取組として、注目されているところです。園での育ちを具体的な子どもの姿として理解し、入学直後から発揮できる力を想定したり、環境構成のプロである保育者の支援策を取り入れ、子どもの学びを促進したりすることが、今求められる力を育てるスタートカリキュラムのマネジメントです。